

### 第40回理事会開催

#### 1986(昭和61)年度の事業計画を決定

トヨタ財団では、去る3月20日東京にて第40回理事会を開催。第4回研究コンクールや国際助成など、1985年度分の助成を最終的に決定するとともに、1986年度の事業計画を決定した。

この結果、昨年度の助成実績は、4億9,336万円、本年度の助成予定額は5億5,500万円となった。その内訳は8頁の表に示す通りである。

#### ●第4回研究コンクール・予備研究助成対象決定

“身近な環境をみつめよう”と題する研究コンクールの第4回については、去年11月から今年1月にかけて全国から140件の応募があり、選考の結果、20チームが予備研究の対象として決定した。(P.2参照)

#### ●研究助成は5月末日まで公募

理事会の決定にもとづき、本年度も研究助成の公募を4月1日より開始した。内容は昨年度とほぼ同様だが、個人奨励研究および予備的研究も、継続申請が可能になったことが異なる点である。公募の締切は5月31日。

申請ご希望の方は、郵送料分の切手(1部:240円, 2~3部:350円)を同封のうえ、研究助成係宛てお申し込みを。

#### ●新たに「活動助成」プログラムを開始

本プログラムは、昨年度、一昨年度と研究助成の特定課題として行ってきた『新しい人間社会を目指した市民活動の記録の作成』に対する助成を引き継ぎ、更に作成された記録の出版に対しても助成を行うことを目的とし

### 第21回研究報告会開催

2月15・16の両日、『ことばを求めて—障害児とコミュニケーション—』をテーマとするトヨタ財団第21回研究報告会が、「ことばあそびの会」と共催のもと、東京・渋谷の“こどもの城”にて開催された。

両日共150人を越す出席状況のもと、Part1.の研究報告やPart2.のパフォーマンスおよびフリートークに、出席者全員熱心に聴き入っていた。(P.6参照)

写真は子供相手に“ことばあそび”のパフォーマンスを演じる波瀬満子さん

#### おもな内容

- ◆第4回研究コンクールの選考を終えて……………2
- ◆研究助成の公募にあたって……………3
- ◆日系新聞シンポジウムを開催して……………4
- ◆フィリピンの地方史研究……………5
- ◆第21回研究報告会から……………6
- ◆新刊紹介、第22回研究報告会の案内・他……………7
- ◆最近の報告書から・他……………8

たものである。公募の締切は「記録の作成」については5月31日。

申請ご希望の方は、「活動助成」と明記のうえ、郵送料分の切手(研究助成と同様)を同封し、活動助成係宛てお申し込みを。なお、「記録の出版」に申請ご希望の方は、事前にお電話にてご連絡を。

#### ●「隣人をよく知ろう」プログラムは4~7月に受付

本プログラムのうち、東南アジア諸国の文献を日本語に翻訳するものについては、本年度より公募期間を4月1日~7月15日までとした。問合せは国際助成部門まで。

#### ●成果発表助成の申請は年中受付

当財団の助成による成果の印刷、出版、シンポの開催、国際学会参加等に関する成果発表のための助成は、年中受け付けている。

#### ●国際助成の応募も年中受付

国際助成は、主として東南アジアの方々による固有文化の保存と振興に関するプロジェクトなどに対して助成するもので、助成の決定は10月だが、公募期間は特に定めず、年中打診に応じている。





第4回研究コンクール

予備研究助成対象の選考を終えて

選考委員長 浅田 孝

●過去最多の応募件数

昨年11月に公募を開始した第4回の研究コンクールは、この1月15日に応募を締切った。応募件数は前回の86件を大きく上回り、過去4回で最高の140件に達した。

応募の地域別では大都市地域からのものが目立って増え、東京・大阪・愛知の3都府県で62件、全体の44%を占めている。研究テーマでは、自然環境を主な対象としたものが相対的に減少し、その分、生活環境や社会福祉や文化に関するものが増えている。ここ数年、環境問題の内容やそれに取組む市民活動の形も徐々に変化してきており、財団としてもそれに即応するよう工夫してきたが、その結果が今回の応募テーマの分布にも反映されたと考えてよいのかもしれない。

●選考について

さて、1月末から2月にかけて各委員は、全応募案件に目を通しABCの三段階評価を行ったうえ、2月25日の委員会では全委員出席のもとに5時間を越える熱のこもった審議が行われ、20件の予備研究助成対象候補を選出、その後開かれた第40回理事会にてそれらを助成対象とすることが決定した。

このコンクールの主旨は、得意の分野や立場をことにする人々が、自分たちと共通の関わりを自覚したテーマについて、主体的・発見的・実践的・創造的な学習を通じて環境の諸問題と取り組み、むしろ生活者の立場からその本質に迫ろうとする試みを勇気づけ奨励しようとするところにあるといってもよい。そのためにユニークで興味深い研究であっても、地域外の人々が中心のものや専門家が主導するものは、残念ながら選からもれることとなった。これらの中には、むしろこの4月から公募を開始する一般の研究助成への申請が相応しいものが少なくなかった。

●多彩な助成対象チーム

研究の参加者はチーム毎に大変バラエティに富む。例えば、老人大学の同期生が集まって自分たちの生きがいを模索するものや、地方都市のゴミ焼却場建設問題を契機に主婦たちが中心となって水質保全のテーマに取り組むものや、身体障害者を中心とするグループが自らの問題として食環境を取り上げるものなど、である。いずれのチームもそれぞれに独自の面白さをもっている。それを大いに発揮して8月の末までに創造力豊かな研究実施計画を立案していただきたい。

また今回パスしたものの中には何度目かの挑戦になるものもいくつかある。今回惜しくも選にもれたチームも、それぞれの地域で地道な活動を継続して次回のコンクールに是非とも再挑戦していただきたい。

最後に、膨大な量の応募書類を鋭意ご審査いただいた選考委員の先生方に深くお礼申し上げるとともに、この研究コンクールのゴールにむけてなお一層のご指導をお願いしたい。

予備研究助成対象一覧

研究会名 代表者名(年齢)	研究テーマ	対象地域 共同者数	助成金(円)
1. 名古屋ため池の自然研究会 近島繁隆(52)	名古屋市東部とその周辺のため池の現状調査と都市環境に果たす役割および自然教育の場としての活用についての研究	愛知 8他	500,000
2. 北条市の飲み水を守る会 坂本信子(45)	北条市水道水源の水質保全の研究 (ごみ焼却場建設に関連して)	愛媛 24他	550,000
3. おいあわねっか屋久島 奥田本彦(34)	植物の宝庫といわれる屋久島において人は植物たちとどのようにつきあってきたか	鹿児島 10	600,000
4. 世田谷区老人大学生活コース8期生グループ 安斎義典(70)	クリエイティブ生きがい 世田谷区のある高齢者グループの模索	東京 29	500,000
5. オホーツク流水研究会 山原良一(57)	オホーツク海沿岸の流水と人間生活のかかわりに関する研究	北海道 14他	600,000
6. 江戸のある町上野・谷根子研究会 浦井正明(47)	上野・谷中・根津・千駄木の「親しまれる環境」の調査研究	東京 12	500,000
7. 神田サウンドスケープ研究会 鳥越けい子(30)	神田のサウンドスケープその歴史と現状	東京 14	500,000
8. 倉吉・文庫のあるべき委研究会 生田昭夫(37)	情報化社会の中に生きつづける「文庫」の研究 地域・家庭文庫やおもちゃ図書館を通して見た、母親と子供の生活環境の研究	鳥取 12	550,000
9. 茅ヶ崎自然に親しむ会 平石 広(37)	都市化の中で谷戸の自然環境を考える 一茅ヶ崎市・天神原谷戸の生物相の研究一	神奈川県 12他	500,000
10. 礼文島自然保護研究会 谷口弘一(50)	礼文島における自然保護及び島民のための環境教育カリキュラム	北海道 23	550,000
11. 緑の鉄道研究会 大島久明(36)	緑の鉄道構想 一野生動物を身近に取り戻すために一	東京 15他	500,000
12. 「甲府と世界」プロジェクトチーム 大沢英二(52)	甲府と世界とのつながりを明らかにする	山梨 16	500,000
13. 神奈川メダカの会 綿貫知彦(47)	「神奈川にふたたびメダカを」神奈川におけるメダカの生息調査とメダカ放流をめざして	神奈川県 10他	500,000
14. コミュニティ生態学研究会 堀内美良(48)	「福祉のまち船荷山」のコミュニティ 障害者が気になく自由に動けるまちの環境の研究	長野 6	500,000
15. 夕張学研究会 太田 泉(53)	住環境としての炭住街が夕張の精神的風土をどう育んだか一再生に向かういま、改めて問直す炭鉱の心と暮らし	北海道 17	550,000
16. ダイビングチームシーフロッグス 大高 淳(29)	浜名湖における水中環境変化と生物の生態に関する研究	静岡 14	500,000
17. 石垣島アンパル野鳥研究会 本成 尚(33)	石垣島アンパルの野鳥たち	沖縄 29	650,000
18. 行徳野鳥観察会の友の会 東 良一(31)	よみがえれ新浜一水質浄化と水鳥の誘致	千葉 19	500,000
19. しりたいたいクラブ 谷口明広(29)	重度身体障害者の「食環境」に関する研究 一京都市における調査を中核にして一	京都 13	500,000
20. 八王子市寺沢地区・酪農ウイレッシ(村)研究会 鈴木 昇(65)	都市環境としての酪農・農村集落存続の試み 一多摩ニュータウン19住区及び隣接地に於ける都市と農村の共存を目指して一	東京 26	500,000
合 計	20 件		10,550,000



本務研究か裏作研究か —研究助成の公募にあたって—

研究助成部門 プログラム・オフィサー 山岡 義典

●カイト・フォトグラフィー展のこと

去る2月20日から3月4日にかけて、新宿野村ビルの一階ホールで「カイト・フォトグラフィー展」が開催された。前号の財団レポートでも紹介したように、昨年の末に『カイトフォトグラフィー』（室岡克孝著、写真工業出版社刊）という写真集が出されたが、それを記念してのものである。

会場には、室岡氏による手作りのカイト（凧）数点とともに、氏が自ら撮影した写真や氏の指導によって多分野の研究者たちが撮った写真が展示された。カイトを用いて空から写真を取る方法は、他の空撮法に比べて様々な利点がある。特に持運びが便利で一人でも撮影できるのが魅力である。今後の環境研究、とりわけ身近な環境や人里離れた僻地環境の研究には新しい可能性をひらくように思われる。2月22日にはその可能性を語り合うために、財団の会議室で20名程が室岡氏を囲んでミニシンポジウムを開いたが、大変興味ある議論がかわされた。

●本務を離れて

さて、当の室岡氏であるが、氏はカイトの専門家でも空撮の専門家でもない。ましてやアカデミックな意味での環境科学者でもない。設計事務所を主宰する建築家なのである。従ってカイトの開発や製作、撮影旅行も本職の建築設計の仕事の合間ということになり、それだけに助成を受けてからの1年間は大変であっ

たらしい。

もうかなり以前のことになるが、研究助成の選考委員会で「本務研究」という言葉がよく飛交った。大学の先生方が、その本来の専門の研究をその職場の仲間たちだけで行うようなのが典型的な「本務研究」というわけで、そういう研究には、民間財団の助成はあまり必要ないのではないか、という議論である。本務を一步離れて、社会的にも本人の生き方としても、何か新しい世界を切り開こうとする時こそ、財団の助成が必要であり、そういうものこそ優先すべきだというわけである。

この考えを徹底させたプログラムが「身近な環境をみつめよう」をテーマとする研究コンクールであるが、一般の研究助成においても基本的にはこの考えを継承している。学際的・職際的・国際的な共同研究というのもその一つの反映である。

このような本務から少し離れた研究を何と呼ぶか、うまい言葉がない。趣味的研究では社会的な意味が感じられないし、社会的研究では何かゆとりがなくて重すぎる。本務外研究では消極的だ。そこで、このような研究を「裏作研究」と呼んだらどうかと最近私は思っている。

●「裏作」のある生活

この言葉は、工業デザイナーの秋岡芳夫氏の発想にヒントを得ている。昭和53年の秋から3年間にわたり、当財団では氏を中心とする東北農村への「裏作工芸」導入に関する実践的研究に助成を行った。その成果は、「大野村方式」として徐々に各地に広まりつつあるが、要約して言えば、大都市に出稼ぎに出る代り、冬の間、地元の材料を用いて工芸をやれないか、というものである。山村の新しい生き方の問題として工芸を取り上げたわけである。

この実践的研究は、私たちに色々なことを考えさせてくれた。そこには生活文化の新しい芽があり、生き生きとした何かがあるように思われた。「裏作」のある生活こそが、これからの豊かな生活ではないか。都会に住む私たちこそ、今「裏作」が必要ではないか、と感じたのである。「裏作」は単純なサイドビジネスではない。いくら生産的でないと空しいが、それよりも余欲があって楽しいものでなくてはならない。しかも、個人的な活動というよりは、社会参加性の強いものでなくてはならない。時にはボランティアとしての性格も持つ。「表作（＝本務）」がフォーマルな世界なら、「裏作」はインフォーマルな世界であろう。「表」に較べれば、「裏」にはある種の自由さがある。しかし、「裏」は「表」と無関係ではない。「表」の能力が「裏」にも生かされるべきだし、「裏」で得た刺激が「表」に活力を与えることも重要だ。「裏」がいつのまにか「表」になることがあってもよい。

こう考えてくると、「裏作」という言葉は実に含蓄の深い意味を持っているようである。そういう意味で、室岡氏のような研究は「裏作研究」と呼んでもいいのではないかと思う。もちろん秋岡氏の研究もそうである。

●裏作研究のススメ

本年度も、4月1日から研究助成の公募を開始した。昨年度までの特定課題であった「市民活動の記録の作成」を独立したプログラムにした以外は、昨年度と基本的には変化はない。具体的な内容については応募要項をご覧ください。私たちが求めている研究を一言で言えば、本務研究というよりは、裏作研究に近いものということができよう。専門の枠組みから二歩か三歩程はみだしたもので、あるいは職業的制約を離れて何か新しいことに挑戦しようとするものである。何ものにもとらわれない自由な発想による研究から新しい人間社会が開けてくることを期待したいのである。

写真展会場にて説明をする室岡氏





## ロスアンゼルスでの日系新聞シンポジウムを開催して

日系新聞研究会代表（東京経済大学教授）田村 紀雄

## ● 国際的・学際的集會に400人

日系新聞研究会は、1981年以來の米国における研究成果の発表の一つとして、1985年9月中旬、ロスアンゼルスで2日間におわたるシンポジウムを開いた。

全体のテーマは、「30年代の新世代—2世と日系紙」(Coming of Age in the Thirties: The Nisei and the Japanese Immigrant press)、トヨタ財団の他、米国側では、ロスアンゼルス・タイムス社、加州人文研究基金の會議助成を得た。参加者は、研究者、日系新聞関係者、1世、2世、それに白人の学者など延べ400人に達した。

1930年代に焦点を当てたのは、日系移民が永住を決意し経済的にも発展したこの時期は、一方ではアメリカ生まれの2世の成長の楽しみ、片や日米関係の悪化という複雑な時代であったからである。排日気運に加えて、日本のファシズム化と、中国侵略が、米国の対日世論を一層厳しくし、それがまた、日系人コミュニティ内の1世と2世の間に微妙な影を落としていた。

シンポジウムは、5つの全体會議、11の分科會、2つのアトラクションから成る盛りだくさんの内容で、いずれも事前には十分な準備と、ペーパーが用意された。全体のオーガナイザーは、UCLAのユージ・イチオカ教授が担ったが、パネル會議や分科會には、阪田安雄(UCLA)、ピンス・タジリ(元日系新聞記者)、ケイツ・クニグ(元ハートマウンテン・センテネル編集者)らが司會として協力した。

## ● 30年代の日米関係と2世

分科會のテーマは、第2次大戦前の日系紙(日本語ページ)のファシズム同調の動き、これに対する英文ページの異なる論調、日本の中国侵略を批判する日系

左翼の新聞の出現、2世の英字紙の拡大、戦時収容所の新聞など、広い範囲のものであった。実際に、これらの新聞に携わったハリー・ホンダ、ビル・ホソカワ、ワード・イマゼキ、マサモリ・コジマ、カール・ヨネダ、トゴ・タナカラが報告者や討論者として加わった。

私は、1930年代に米国日系左翼が祖国日本へ向けて発行した反ファシズムの新聞や雑誌『国際通信』『海上通信』『太平洋労働者』などについて報告したが、この発行に携わったカール・ヨネダ、また印刷をしたサンフランシスコの金門印刷所の岡繁樹の甥、岡省三らが意見を述べた。

また、日本から参加した新井勝紘は、自由民権運動家として1880年代に米国へ政治的避難をした人達の1930年代の状況を報告し、有山輝雄らが討論した。同じく日本から参加した白水繁彦は、ハワイにおける30年代の日系紙の報告を行った。

## ● 日系作家と日系新聞への寄稿

アトラクションの「2世作家と移民紙」は、演出効果もあって、雰囲気盛り上げた。2世の作家として日系紙の英文ページに作品を発表してきたメリー・ストウ、ジェームス・オームラ、ヒサエ・ヤマモト、モリー・ミトワ、ジョー・オヤマらがパネリストとして出席、自分の作品と日系コミュニティについて語った。いずれも高齢に近い人達であったが、その青年期の作家活動を、若者のような熱

気で振り返った。

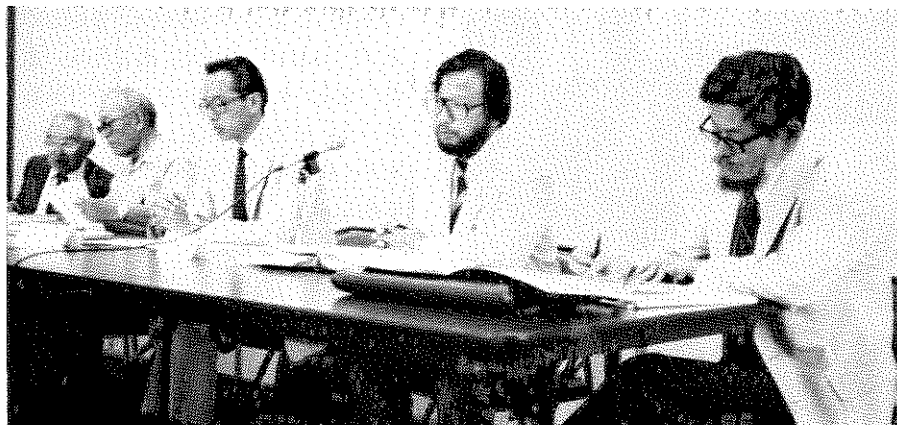
その1人J.オームラは74歳、1944年までコロラド・タイムス、ロッキー新報などに数多くの小品やコラムを書いてきた。H.ヤマモト、羅府新報などへの寄稿活動を通じて作家としての地位を築き、戦後はパーチザン・レビュー、アリゾナ・クォーターリーなどの一般紙に作品を載せるようになった。

3世などの若い女性作家の集團であるPAWWによる作品朗読は、エマ・ジーによって進行した。ここでは30年代に発表された詩、エッセイ、小品が、それを継ぐ若い女性作家によってドラマ風に読みあげられたのである。最後の全体を締括るパネル討論「2世と30年代」では、30年代の婦米2世、労働運動家、米国への忠誠を示した2世など、さまざまな立場の人達が、当時の確執を越えて、50年ぶりに意見の交換を行った。

多くの2世は、おそらく、この50年ぶりの再會を、あるいは最後と考えたかもしれない。シンポジウムには、白人の姿も目立ち、30年代の日米関係と、1980年代のそれとを二重写しに見たに違いない。

日系新聞は、米国の各エスニック集團の新聞の中でもその人口に比して、もっとも発達しているもののひとつであり、日刊紙を含む数十の新聞が、10数都市で発行され続け、部数の微増も見られる。他のエスニック集團にとっても、ひとつのモデルである。このロスアンゼルスでのシンポジウムの報告は、書き改められて、英文出版物としてまとめられる計画である。1986年は、サンフランシスコに最初の日系紙『東雲雑誌』が創刊されてちょうど1世紀目にあたる。

一分科會の風景：右から2人目が筆者





## フィリピンの地方史研究

国際助成部門 プログラムオフィサー  
若山佳子

### ●はじめに

最近のフィリピンの政変は、世界中の注目を浴び、その劇的な展開が刻一刻とテレビを通じて報道された。第3世界の一国の動向が、日本のジャーナリズムでこれだけ大規模にとりあげられたことは、未だ前例のないことであった。そしてフィリピンは今、一応の平静を取り戻したかに見えるが、その前途には厳しいものがある。

トヨタ財団の国際助成部門では、東南アジア諸国で行われる研究プロジェクトに助成を行っており、その対象となるのは、主として、各地域の固有文化の保存と振興を目指す研究プロジェクトである。固有文化の保存と振興と言っても、具体的には国により、助成対象となる分野にそれぞれの国柄が反映されている。

### ●ますます大切な地方史研究

フィリピンの場合、地方史研究が一つの重要なテーマとなってきている。この国は、歴史的に植民地時代が長く、しかも複雑な多民族国家であるため、そのアイデンティティ探求の努力は今も続けられている。また、その歴史についても、これまでに書かれてきた歴史書では、首都マニラを中心とする政治的・行政的体制を扱っているものがほとんどであり、それも外国人によって書かれたものが多かった。このように、フィリピンの歴史

イロイロ州・サンタババラにある歴史的建造物のカトリック教会



研究にはあまりにも多くの欠落部分があるため、フィリピン歴史家によるフィリピン国史は未だ完成されていない。これらの欠落部分を埋めるためには、フィリピン社会を構成する様々な民族と様々な地方の歴史とを再構成することが必要である。このような状況の中で、近年、地方史研究の重要性が認識され、歴史研究の主要な課題となっている。現在のこの社会の直面する問題の背景を明確にし、アイデンティティ確立のための基礎を築くには、地方史研究の果たす役割は大きい。

### ●フィリピンの概況

ここで、助成対象となっている地方史研究のいくつかを紹介する前に、フィリピンの概況について述べておきたい。

合計面積が約29万km<sup>2</sup>、7100の島々から成るが、その主要な島は以下の3つのグループに分けられる。1)北のルソン島とミンドロ島、2)中央のヴィサヤ諸島(サマル島、レイテ島、ボホル島、セブ島、ネグロス島、バナイ島、マスバテ島、パラワン島)、3)南のミンダナオ島。人口は約4790万人で、その約91%がキリスト教徒(全人口の83%がカトリック、9%がプロテスタント)であり、約7%がイスラム教徒である。言語グループは、75以上あるとされるが、主要なものは以下の7言語グループである。1)タガログ、2)セブワノ、3)イロンゴ、4)ワライ・ワライ、5)イロカノ、6)パンパンゴ、7)ピコール。現在国語の一つとして、英語と併用されているピリピーノはタガログ語を基礎にしている。教育は、義務教育が7年、高等学校が4年、大学が4年で、大学の数は約400、学生数は129万人と言われる。全国平均文盲率は10.73%である。地方行政区画は、66の州、58の特別市、約1400の町、約30,000の村から成っている。その歴史を概観すると、①スペイン統治以前、②スペイン統治(1571—1898)、③アメリカ統治(1898—1946、この中には短期間の日本占領期も含まれる)、④独立(1946—現在)の4期に分けられる。

### ●現在進行中の地方史研究

上記のような複雑な状況を持つ同国では現在、以下のような地方史に関する研究プロジェクトが、当財団の助成を受けて進行中である。

1901年より1972年までの北部フィリピン・パンガシナン州の地方史(フィリピン大学、R.M.コルテス):地方史研究の草分け的役割を果たしてきた同氏が、パンガシナン州の地方史について、今までに行ってきた1572年から1900年までの研究の延長上に、パンガシナン州史を完成しようとするもの。/ワライの伝承—レイテ地域の地方史と社会変化(J.B.ポロ):ワライ語が話されているレイテ島の儀礼などの伝承を調査することにより、地方史研究に民俗学的、人類学的視点から取り組もうとするもの。/イロイロの史跡と歴史的建物の記録と研究(フィリピン大学ヴィサヤ分校、H.F.フンテッチャ):パナイ島・イロイロ州の歴史的、文化的に重要な史跡と建物のインヴェントリーを作成し、その記録を行うもの。/ネグレンス—1805年より1985年までの社会、文化、経済史(ラ・サル大学、V.L.ゴンザガ):砂糖価格の下落により危機に直面しているネグロス島の大農園の歴史的背景を明らかにしようとするもの。/ペガンボン—ラナオの複数のサルタン制度の歴史的研究(ミンダナオ州立大学、M.R.タワゴン):ミンダナオ島のイスラム・グループの一つであるマラナオ族が多くのサルタンを有する理由を、歴史的に解明しようとするもの。/異文化間交流的視点から見たダバオの3民族グループ(アテネオ・デ・ダバオ大学、H.K.グロリア):ミンダナオ島のダバオ地域のヴィサヤ族(キリスト教徒)、マギンダナオ族(イスラム教徒)、バゴボ族(非イスラム教徒少数民族)の歴史的経験を民族誌として記録するもの。

なお、使用した統計は「東南アジア要覧」—1985年版等にもとづいている。



## ことばを求めて

—障害児とコミュニケーション—  
第21回研究報告会から

今回の研究報告会は、これまでの助成研究の中から、“障害児とコミュニケーション”に関連するいくつかの研究を中心に、いわゆる障害を持つ子供たちと言葉のかかわりを通して、言葉について考えていくことを目的として企画したものである。

東京・渋谷の「こどもの城」を会場に、Part 1〔2月15日（土）〕では研究報告が、Part 2〔2月16日（日）〕ではパフォーマンスとフリートキングが行われた。以下、プログラムに従って概略を紹介しよう。

### ●Part 1. 第1部では……………

『ちえおくれの子どもたちとことば』と題して、2件の研究報告が行われた。

まず、西村辨作氏（愛知県心身障害者コロニー・発達障害研究所主任研究員）からは、「子どもの発達とことば—ダウン症児の「ことば」の訓練」をテーマに、①ダウン症児の言葉の発達と障害、②発達に応じた言葉の訓練の工夫、等につき報告があった。

続いて「“ことばあそび”と子どもの反応—ことばの働きかけによる言語指導」では、“ことばあそび”を始めた波瀬満子氏（ことばあそびの会・女優）より、研究の動機・目的、および“ことばあそび”の実際について、ビデオを用いての説明が行われた。また、共同研究者の谷俊治氏（東京学芸大学教授）からは、“ことばあそび”についての評価に係わる報告があった。

その後、これらの研究に対し、長谷川恒雄（伊豆山温泉病院院長）、播磨靖夫（わたぼうし文化基金理事長）、藤田弘子（大阪市立大学助教授）の3氏より、各々が現在行っている研究や事業に立脚したコメントがなされた。

### ●Part 1. 第2部では……………

ここでは、『耳の不自由な子どもたちとことば』と題して、3件の研究報告が行われた。最初に、岡田明氏（筑波大学教授）からは、「聞こえと見えに障害のある子どもたちの持っていることばと言語指導プログラム」をテーマに、聴覚障害児の「ことば」の特徴と、言語促進プログラムについての報告があった。

次の「日本語と対応する手話を求めて—手話辞典編纂の試み」では、田上隆司氏（手話コミュニケーション研究会代表）より現在編纂中の日本語に対応した手話辞典の概要等についての報告が行われた。

最後に、田村進一氏（大阪大学助教授）からは、「機会が創り出すもうひとつのコミュニケーション—パソコンによる手話通訳システム」について、話しことばをパソコンを用いて手話として画面に映し出すシステムに関する報告があった。

（なお、このシステムについては、翌日別会場にて、デモンストレーションが行われた）

その後、以上の研究について、中島誠（京都大学教授）、塩谷治（筑波大学付属盲学校教諭）、宇野小四郎（現代人形劇センター理事長）の3氏よりコメントがあった。

### ●Part 2. 第1部では……………

次のようなパフォーマンスが2件、演じられた。

まず最初が、（財）現代人形劇センターの運営する「デフ・パペットシアター・ひとみ」による人形劇『手と手と手・顔がおカオス』。このひとみ座は、ろうあ者も共に楽しめる人形劇を全国各地で公演している劇団で、今回の出し物も「手」と「顔」だけを用いた実にユニークなパフォーマンスであった。

続く『アラマせんせいのことばあそび教室』では、“アラマせんせい（本人のアダ名）”こと波瀬満子氏（前出）が、会場の子供を相手に“ことばあそび”の実際を演じてみせた。

### ●Part 2. 第2部では……………

『ことばのむずかしさ、ことばのたのしさ』をテーマに、谷川俊太郎氏（ことばあそびの会代表・詩人）と波瀬満子氏を中心に、フリートキングが行われた。

「大人の思い込みで障害児の発達を拒んでいることがある」「子供どうしだと残酷な事を言ったり、したりする時もあるが、それが反って障害児にはためになる。だから、子供どうしの中で育ち合っていく中で言葉を学びとっていくのが良い」「現在の障害児（者）教育は、障害のある状態を普通の状態を目指すように思われるが、障害者は、やっぱり障害者であって、“特別な人”なのである。健常者と比べると異常に見えるのであって、障害者本人にとっては、障害のあることがむしろ普通である。こういう観点から、もう一度障害児教育を見直していく必要がある」etc. ……

また、Part 1の研究報告については、「障害児の発達の変化の過程を追った報告がなかったのは残念だ。」「障害を持つ子供が、どうしたら“生まれてきて良かった”と思うように出来るのかを見出したかったのだが…」などと不満も出され、これに関連して障害児（者）問題に係わる研究者の研究姿勢のあり方を問う発言や、それに応答しての報告者側からの発言などが交された。

福祉—とりわけ障害者—の分野においては、研究者の側も、親や施設など現場に携る側も、双方が極力歩み寄りながら共同で問題の解決にあたっていかなければならないのだと痛感させられた一幕であった。（渡辺記）

フリートキングのひとつコマ







## 『これからの民間助成財団』 発刊

トヨタ財団編 東洋経済新報社刊  
四六版 296頁 1,800円

トヨタ財団が、設立10周年を記念して一昨年の秋に開催した国際シンポジウムの記録が、この程、東洋経済新報社のご好意により出版されることになった。

思えば、このシンポジウムは、“フィランソロピー”の世界で活躍されている有志の方々のご厚情により実現することができた。アメリカでは、財団関係の図書が多く出版されるが、日本ではそうはならない。この本についても当初は、「自費出版でも」と考えたが、それでは、いつまで経っても多くの人達の目に触れることがない。今回の出版を機に是非多くの方々に読んでいただき、民間助成財団についての理解を深めていただければと願っている。

本書は、財団活動の実態によく迫って

いる。それはまず、報告者・パネラーに世界の各地から集っていただいたこと、また、財団活動をすすめる立場ばかりでなく、助成を受ける立場の方々からも示唆に富んだお話を伺うことができたことなどによろう。ヨーロッパ・アメリカの財団関係者からは、財団の近況ばかりでなく、活動を支える高い理念を、そして東南アジアの財団関係者からは、これまであまり耳にすることのなかった彼地の財団事情などを伺うことができた。国内からは、様々な活動をすすめている多くの財団関係者から貴重なご意見を、そして助成を受ける立場の方・財団活動を側面からサポートして下さる方々からは、助成財団への要望などを伺うことができた。そして、卓抜した司会により、フロアを交えた活発な討論が引き出されている。これまで、あまり知られることのなかった財団活動について、多角的に理解することができよう。(山口記)

## 新刊紹介

## 『文化としての先端技術(下)』

文化としての先端技術を考える会・編著  
日本放送出版協会刊  
四六判 265頁 1,600円

財団レポートNo34で紹介した上巻の続編。上巻には、ロボット、コンピュータ、ニューメディア関係の8編がとりあげられたが、ここではバイオテクノロジー、新素材、エネルギーに関しての7項目がとりあげられている。

先端技術の第一線で活躍しているゲストの報告と、それをもとにフォーラムのコア・メンバーが執筆した論文によって構成されている。巻末には、元在日フランス大使館・科学アタッシュェのM.ブレン氏の特別寄稿が収められている。先端技術の持つ文化的な意味を問うというフォーラムの議論の一端が読みとれよう。

## 『日本の技術力—戦後史と展望—』

中山 茂・編  
朝日新聞社刊(朝日選書)  
四六判 257頁 950円

何らかの形で戦後日本の科学技術の発達に係わってきた方々の6篇の論文を中心に、編者が序章を加え、海外の5名の識者からのコメントを付し、巻末には官・産・学・民の区分による戦後科学技術史年表を収録したもの。

中山茂氏を代表とする「科学と社会フォーラム」は、当財団のフォーラム助成により、昭和57年秋にスタート。以後、多くの関係者の議論の中で、戦後科学技術の社会史に関する研究プロジェクトの可能性を検討してきた。今回の出版は、2年目の研究会の成果の一部を編纂したものである。執筆者は、岸田純之助、星野芳郎、森谷正規、林雄二郎、川上武氏等、戦後科学技術史に深くかかわってきた方々である。

## 第22回研究報告会のご案内

## 森林と環境

## —新しい可能性の探求—

◇日時：1986年4月25日(金)

10:00~17:00

◇場所：虎ノ門パストラル・新館4F  
(東京都港区虎ノ門4-1-1)

## ●基調講演：『文化と森林』

林 知己夫(放送大学)

## 研究報告 1(日本の場合)

1. 旧木曾御料林の森林経営を分析する  
南雲秀次郎(東大・農)  
未田達彦(名大・農)
2. 甕焼畑林業システム—新潟県  
山北町・他—  
北村昌美(山形大・農)  
村尾行一(東大・農)

## 研究報告 2(東南アジアの場合)

1. アグロフォレストリーによる森林再生と地域社会  
森田 学(京大・農)  
渡辺弘之(同上)
2. 低地林の生態系を生かした生産システムの可能性  
高谷好一(京大・東南アジア研究センター)  
遅沢克也(京大・農学研究科)

## ●総合討論：『森林・環境・生産』

司会 沼田 真(淑徳大)



## ◎出席ご希望の方へ……………

住所・氏名・所属(勤務先)を明記のうえ、お葉書にて4月21日までに研究報告会係宛てお申し込みください。

なお、定員に限りがありますので、申し込み多数の場合はお断りする場合があります。予めご了承ください。



## 1985年度助成額および1986年度助成予定額

項 目	1985年度助成額(万円)		1986年度助成予定額(万円)
1. 研究助成*	74件	22,460	20,000
2. 活動助成	—	—	2,500
3. 研究コンクール	20件	1,055	5,000
・第3回	—	—	1,000
・第4回	20件	1,055	4,000
4. 国際助成	52件	12,700	13,000
5. 翻訳出版促進助成	24件	5,650	7,000
・日本向け	11件	1,858	2,000
・東南アジア向け	5件	1,814	3,000
・東南アジア相互	8件	1,978	2,000
6. 辞書編纂出版助成	—	—	1,200
7. フォーラム助成	6件	1,500	1,300
8. 民間助成活動促進助成	1件	1,000	1,500
9. 成果発表助成	40件	4,821	4,000
10. その他の助成	1件	150	—
合 計	218件	49,336	55,500

(\*) 1985年度の研究助成は、1986年度の活動助成相当分・11件、1980万円を含む。

## 最近の報告書から

当財団の助成研究から「成果発表助成」によって印刷された報告書をご紹介します。入手ご希望の方は、送料分の切手を同封の上、財団レポート係宛てお申し込み下さい。なお、品切れの際はご容赦願います。

## III-030 南島入墨習俗の研究

(名嘉真宜勝他、B-5 164頁 和文 送料 250円)

沖縄・宮古・八重山など南島には、かつて適齢期の娘の手甲にハジチと称する入墨を施す風習があった。明治政府の禁令により、現在では、90歳前後の老婆にしか見ることができない。本報告書は、今まさに失われようとしているこの習俗の実態を、数百にのぼる事例調査からまとめたものである。入墨の模様の種類、施術に関連した歌謡・伝承・儀礼など、資料として歴史的に貴重なものとなろう。

III-033 技術移転の促進に係わる中国の経営管理の実態及び今後の課題に関する予備的研究(張仁凱他、B-5 143頁 和文 送料 250円)

日中技術移転について関心を共有する若手実務者から成るシステムズ・アナリ

スト・ソサエティによる標題の研究に関する第2回目の報告書である。内容は、前回もとりあげた5つの企業についての技術移転後の追跡インタビュー、訪中調査レポート、1984年度の日中取引動向の資料・分析、関連文献・資料リストなどから構成されている。

## III-033 語りの中の生活史—アイヌ無形

民俗文化財の記録—

(アイヌ無形文化伝承保存会編、B-5 和文 339頁)

アイヌの古老が口述した録音テープをもとに、アイヌ文化・言語の研究者が、翻訳・編集を行った文化遺産の記録である。日常生活を舞台にした物語4編から、具体的なアイヌの人々の暮らしを読みとれるよう配慮され、豊富な訳注、索引、英文解題なども完備し、研究資料としても価値が高い。今回は、シリーズの第7巻にあたる。〔なお、本報告書は、実費2,000円(送料 300円)で販売されてい

る。購読ご希望の方は、「アイヌ無形文化伝承保存会」(〒060 札幌市中央区北1条西7丁目 北一条第一生命ビル ☎: 011-221-0019) まで直接お申し込みください。]

IV-008 乾田化および新港建設がもたらした富山県射水地域の変容に関する研究(足立原貴他、B-5 320頁 和文 送料 300円)

6人の共同研究者と2人の研究協力者による「射水地域研究会」は、昭和54年11月から57年10月まで、3年間にわたり、富山県射水地域の乾田化と新港建設を核とする地域総合開発事業の展開過程を追い、地域開発計画のあり方を検討してきた。本書は、その成果をまとめたものであり、緒論・結論も含め、6章より構成されている。

## ●お知らせ

昨年度の研究助成に係る中間報告会を下記の通り実施する予定です。ご関心おありの方は、研究助成部門までお問合せください。(場所はいずれも東京)

- ・予備的研究 5月7・8日(水・木)
- ・特定課題(活動助成) 5月15日(木)

## 編集後記

◆行政や企業とは一味違う財団。内外環境厳しき折柄、小粒だがピリリと辛い存在になることを目指し、気分も新たに新年度事業をスタート。どうかご支援を!

◆田村先生、ご寄稿有りがとうございました。感動的な出会いがあったようですね。ハワイの皆様どうぞヨロシク。

◆第21回研究報告会では、お申し込み頂いた方全員にご出席頂けず、本当に申し訳ございませんでした。事務局の不手際を改めてお詫び致します。なお、当日配布資料の入手ご希望の方は、お葉書にてお申し出ください。

## トヨタ財団レポート No.36

このレポートを継続してご希望の方は、お葉書にて財団宛てお申し込みください。

発行日 1986年4月7日

発行所 財団法人 トヨタ財団

発行人 山口日出夫

編集人 渡辺 元

印刷 真友工芸株式会社